

「ICT元年」の国際農機展閉幕 来場20万人超 海外も注目 雨天、会場足場に影響も

2018年7月17日

第34回国際農業機械展 in 帯広は、天候が優れない中でも前回以上の20万1000人が来場し、省力化を実現するICT（情報通信技術）搭載機器が、人手不足に悩む農業関係者らに注目された。外国からの来場も目立ち、国際的なイベントとしての存在感の高まりを感じさせた。一方、開催前からの雨でぬかるみが目立つなど会場の利便性には指摘があり、来場者、出展社双方にとって使いやすい会場の在り方が課題となった。

「農機のICT元年を象徴する展示会」との位置付け通り、無人トラクターをはじめとした最新機器が並んだ。来場者は前回は1000人上回り、開催委員会の山田政功副会長は「最先端技術を目当てにする人が多かった」と省力化技術への関心が高かったとみる。

地元への経済効果も大きく、帯広商工会議所の高橋勝垣会長も「ホテルや飲食業界も来場増に動くなど活況だった」と話す。

外国からの来場も多かった。特に中国は、5月に李克強首相が道内農業を視察したことで注目され、団体客が200人訪れた。都市部への人口集中で農村の人手が足りず、ICT農機の需要もあるという。中国農業機械工業協会の陳志会長は「この農機展は中国でも有名。日本の機械は精巧で評判がいいので輸出も進むだろう」とみる。

開催期間中には管内の作業機メーカーらが、国際的な通信規格「ISOBUS（イソバス）」対応農機の開発推進団体を立ち上げると発表。従事者の減少で国内市場の縮小が避けられない中、輸出も視野に入れる。関係者は「国内客は農家が減っているのだから少なくなるが、今後は海外の来場者が増える」と考える。

国際的な注目度が高まる中、指摘されたのが会場の利便性だ。今回は開催前から雨に見舞われ、展示農機がぬかるみにはまるなど準備に苦慮。開催中も足場の悪い所が目立った。会場の狭さを口にする出展者もあり、関係者は「来場者も出展者も不満はあったと思う」と推測する。

車列の動線も検討を要する。開催初日は貸し切りバスやタクシーが想定以上に来場し、会場内や付近の道路は混み合った。臨時駐車場とつなぐシャトルバスの運行にも影響が及び、乗車を待つ人が列をつくった。

山田副会長は「海外からも多くのお客さまが来る中で、恥ずかしいイベントにはできない」とし、次回開催に向けて関係者と会場の在り方を検討する考えを示している。（伊藤亮太）

◆のぼり掲げパレード 閉会式

第34回国際農業機械展 in 帯広は16日午後、会場の北愛国交流広場で閉会式を行った。

初めに出品社が各自ののぼりを掲げながらパレードを実施。来場者らに感謝の言葉を掛けながら会場内を練り歩いた。

開催委員会の有塚利宣会長が「技術屋の匠（たくみ）の技と裏方の力で成功裏に終わることができた」とあい



農機展に出品した各社がカラフルなのぼりを掲げて会場内をパレードした閉会式

さつ。開催地を代表して米沢則寿帯広市長が「4年後、さらに充実、発展した展示会が開催されることを祈念する」と述べた。

最後に山田政功副会長が「最終日に晴天でお客さまをお迎えできてよかった」と閉会の言葉を述べた。

ホクレンと北海道農業機械工業会、十勝農業機械協議会が主催。4年に1度十勝で開かれる国内最大の農機展。今回は過去最多の134社が出展し、12日から5日間を開催期間とした。



（上）シャトルバスの乗車を待つ人で長蛇の列ができた幕別町の臨時駐車場

（下）雨で開催前からぬかるみが目立った会場。農機を搬入しやすいよう急ぎで鉄板を敷いた